普段着のわたしたち

先月、御朱印をいただきに来られた女性が、「今度はウチの住職を連れてきます！」と言って帰られました。元気の良い方です。そうしたら、今月の月例行事に本当に連れて来られました。絵に描いたような禅宗の立派なお坊さんです。その女性曰く、「ウチの住職は、お寺はこうでなければならないという『固定概念』が強すぎるので、このお寺に連れてきました！」…住職の義理のお姉さんらしいです。聞いていた私は褒められているのかそうでないのか複雑な心境でした（汗）。確かに私のお寺は少し「妙」です。

御来寺された〇〇寺さん、参詣人が増えるとよいですね。再会を念じつつ。　俊徳丸

9/18、大阪、新歌舞伎座でのゴダイゴコンサートへ行ってまいりました。コロナ禍でしばらくありませんでしたので久方ぶり。

なんと、彼ら皆、ボツボツ古稀。一昨年、ギタリストが亡くなっています。

もう悠長なことを言っている時間はありません。いつまで歌えるか、いつまで弾けるか。できるだけ LIVE があれば出かけ、最期を見届けないと！と思っています。

訶梨帝母

皆様観ておられますかな？

もちろん『鎌倉殿の 13 人』です。

ところで写真は 10 年前の大河ドラマ『平清盛』での森田剛演じる平時忠です。鎌倉殿と平行して平清盛も観ています。

平時忠という人の事は法然伝でも書きましたが、優秀すぎる実務官僚で例えばフランスのナポレオン時代のフーシェより数百年早く彼の如き警察官僚としての辣腕を振るったわけです。鎌倉殿だと大江広元も近いものがあります。こういうキャラクターが好きなのですよ。　征阿

先月、岐阜県関市のお寺で開催された「お寺で JAZZ」へ、子どもを連れて行ってきました。

畳に座布団を敷き、腰を下ろして聞く JAZZ というのも新鮮でしたが、生音の迫力に圧倒されて今居る場所がお寺であることをすっかり忘れるほどでした。

やはり生演奏は CD とは違って凄まじいものがあります。もうすぐ３歳となる我が子も何か触発されたらしく、終わった後に CD をせがまれ、購入した次第です。

という訳で、我が住まいでは朝から童謡の代わりに JAZZ が流れるようになりました。　やっさん

自然に寄り添う～四季を見つける～

ぐんと寒くなった。気付けば秋、というよりも早や冬の足音が聞こえてきそうな勢いである。つい先日まで衣替えのタイミングに頭を抱えていたにも係わらず、だ。

今年はラニーニャ現象の影響で、残暑が9月の初旬から10月の初め頃まで続くといわれていた。

ちなみに、ラニーニャ現象とは南米ペルー沖での海面温度が低く、フィリピンやインドネシア等太平洋赤道域の西にあたる海面水温が高いことをいう。この現象が表れている春から夏に掛けては、上空の偏西風が北に流れやすく、日本は暖かい空気に覆われるそうだ。そして、その余波により、夏から秋に掛けては早々と西高東低の気圧配置になりやすいとのことで、秋は短く、木枯らしが吹くのもあっという間との予想がされていた。

最近はお参り先でも、「秋が無い、丁度よい季節は僅か」との声をよく耳にする。「四季はどこにいってしまったのだ」という声も少なくない。

春秋の麗らかな気候は、厳しい暑さや寒さを過ごした私たちを労い、養生させてくれる期間のような側面もあるが、気温の変化だけでいえば、ここ数年は穏やかで安定した気候が続いているとは言い難い印象を受けるのも確かだ。

思い返すと、境内にある彼岸花は10月初旬まで咲いていた。そして、10月も半ばでようやく花が枯れ始めた次第である。昔から暑さ寒さも彼岸までというが、自分の感覚だけでカレンダーを頼りにしていると、どうもそぐわない現状が目に付くようになってくる。

古来から、日本人は四季を重んじ、四季に寄り添って生活を営んできた。花鳥風月という言葉があるように、日本人は日本の風土によって生まれた豊かな文化を、繊細な感覚によって生み出してきた。暑い、寒い、といった単純な感覚も、情緒あふれる親しみをもって自然と結び付け、言葉にして味わい、愛でてきたのである。

そうした時を経て作り上げられたものが歳時記であり、その歳時記を根幹から支えてきたものが暦である。

暦には、立春・立夏・立秋・立冬や春分・夏至・秋分・冬至などの二十四節気や、節分・土用・彼岸などの雑節といったものがあるが、それらはあくまで目安である。少し外れたからといって、先人が編み出し、練り上げてこられた季節感が否定されるものではない。

これらが生まれ、洗練されていった背景には一つの意識がある。それは、雄大な自然とその営みの中に人間という存在の生活があるという意識である。決して、人間の生活の中に自然が存在するのではない。

日本の四季は私たちの感じ方、主観に重きを置くのではなく、自然の営みに重きを置いて存在するものなのである。

彼岸花が枯れ始めた頃、日中の暑さが和らいできた。自然の叡智は、眼の前にあるのだ。

やっさん

こもりうた94

11 月の史実：油小路の変

慶応３年（１８６７）１１月１８日、幕末動乱の京、油小路七条で起きた新選組と御陵衛士の抗争事件。新選組局長近藤勇の妾宅へ招かれた元新選組参謀で御陵衛士の伊東甲子太郎はしたたかに酔った帰り道、本光寺前で絶命。謡曲『竹生島』を謡いながらの千鳥足、そこを槍で突かれて、というのが小説ではおきまりの場面。そして御陵衛士粛清の為に伊東の遺骸を囮に使い、油小路辻に放置。それを引き取りに来た御陵衛士と激闘。新選組結成以来の仲間、元八番隊長藤堂平助が落命するシーンはドラマティックに描かれており、新選組顛末記や幕末モノの見どころの一つ。

さて、総本山光明寺御影堂をぐるりと歩きますと、←こんな擬宝珠が要所要所にあります。よく見ると、油小路通押小路の吉野屋さんご寄進。明和元年（１７６４）７月。徳川家１０代家治の時代ということが読み取れます。

コレをしゃがみこんで眺めながら「おお～、この１００年後に起きる油小路の変、押小路と七条ではちょっと距離があるか。その時この吉野屋さんはまだあったのだろうか」などと好き勝手な妄想をして、一人楽しむこともしばしば。

もし、この「令和４年」をどこかに刻む機会があったならば、そしてそれを百年ののちに、ふと目にする人があったならば、「令和４年って、元総理大臣が銃撃されて亡くなった事件があったんじゃない？」「あったあった、教科書に出てたよ。」なんて思ったりするのでしょうか。

余談ですが、三谷幸喜脚本２００４年大河ドラマ『新選組！』で伊東甲子太郎を演じたのが、若き日の谷原章介氏（当時３２歳）。知的でスマートなイメージの伊東を演じた彼は、人気爆上がりだったと想像します。伊東の墓地は東山区泉涌寺塔頭戒光寺内。当時、伊東ファンなのか谷原ファンなのか、心得違いをしたお考えの浅いお嬢さんたちがどやどやと押しかけたらしく、間も無く立入禁止に。（過熱ブームの１０年前に私が参拝した時は、とても静かな墓地でした。）

現在、どうなっているかと調べてみると、予め申し込みをして許可をいただくと墓地に入れるようです。その際には●戒光寺ご本尊様に必ずお参りする事●写真、ビデオ撮影禁止●新選組コスプレ姿での墓参禁止●石や土の持ち帰り禁止●寄せ書き帳、グッズなど放置しない●墓地で飲食しない●献花は切花に限る、鉢植え放置禁止、などなど至極当たり前の注意事項が書かれています。

どうか良識ある墓参をお願いします。歴ヲタの楽しみを奪わないでいただきたい。

訶梨帝母

姓　名

先日、檀家の H さんのお母さん佐登子（さとこ）さんが 99 歳の天寿を全うされお亡くなりになりました。H さんのお話では、佐登子さんは、お生まれになった時に御両親から「智子（さとこ）」と命名されたそうです。佐登子さんは戦時中に小学校の先生をされていたそうです。その時に校長先生から呼ばれ、「名前を智子から佐登子に代えなさい」と言われたそうです。理由は「智」は本来男性の名前に使うもので、一般女性にはふさわしくないからというものだったそうです。現在では理解できないことですが、当時、上司からの命令は絶対でした。佐登子さんは御両親からいただかれた「智子」という名がとてもお好きだったそうですが、泣く泣く改名されたそうです。そして、生涯「佐登子」を名乗られたそうです。佐登子の戒名には「智」を入れることにしました。

私の母の名前は「眞女主」と書いて「ますめ」と読みました。一度みたら忘れない印象的な名前です。と言うか少し怖い気すらします。母には兄姉が5名いました。5人とも 20 歳までに戦死や病気で亡くなってしまっています。母を含めて6人とも、中国の昔の位の高い人から字を貰って名前をつけてそうで、どれも変わった名前だと思うものだったそうです。末娘の母だけが幼少の頃から母親（私の祖母）から名前ではなくいつも「みーちゃん」と呼ばれていたそうです。理由はわかりません。周りの友達からもそう呼ばれていたそうです。母は大人になって実印を作る時に、ある姓名判断する人からそれを指摘されたそうです。兄姉も含めて貴賓すぎる名前だったそうです。でも、母だけは「みーちゃん」と呼ばれていたので命が助かったそうです。晩年の母がそう話してくれました。先ほどの佐登子さんが智子さんではなく、佐登子さんだから長生きできたのかなと私など思ってしまいます。

私の長男は、「開璃（かいり）」という名前です。私が高校生の時からお世話になっていた鍼灸医の E 先生にお願いしました。できれば、将来僧侶になった際、改名しなくてもよい名前にしてくださいなどと無理難題をお願いしたところ、快く引き受けてくださいました。E 先生は盲導犬と二人でアメリカへ行ってしまう方で尊敬していました。E 先生は開璃の名前のために、盲導犬と二人で市営バスに乗って点字の漢字辞典のある県立図書館へ6回もかよってくださったと後で知り恐縮しました。「璃」は『佛説阿弥陀経』の中にあります。どこか風通しが良く清々しさを感じる名前だと思いました。幼稚園から現在の職場まで、「カイリー」と皆が名前で呼んでくれて、いつもニコニコしている人になってくれました。E 先生ありがとう。

私の知人で姓名判断をしている人がいます。その修行は大変です。字画の数の数え方などをマスターして、毎日かかさず、分厚い電話帳 1 ページ分の名前の画数を数えます。何年か継続すると数えなくてもその一文字の画数が見えてくるそうです。更に継続すると名前を見ただけで画数の数が並んで見えるそうです。更に継続すると、名前をみただけでその人の生い立ち、性格などがわかるそうです。そこまでなるのに、10年以上、電話帳の名前を毎日毎日見続けるのです。

名前というのは、本当に神秘ですね。　俊徳丸

生き残るお寺

いよいよお別れを申し上げる時が来ました。創刊号以来、駄文を書き連ねました（１回休みましたが）。お読みいただいたこと、改めてお礼申し上げます。10 月 30 日に住職を引き、一介の佛教好きのジジイになります。

良き後継者に恵まれたのはひとえに佛さまの計らいです。肩書が取れますので、読者の皆さまのようにお寺巡りを楽しむつもりです。

当山は元亀２年(1571)の開創。織田信長による比叡山焼き討ちの年です。451 年に及ぶ法灯を継承するとは、「絶対に倒産させない」と宣言することなのです。

マネージメントの神様ドラッカーの言葉に、「**企業**にとって第一の責任は、存続することである㊟」。これを次のように引用しますと、「**お寺**にとって第一の責任は、存続することである」。

ただ、20 年後には日本全国で約４割のお寺が廃寺となる予想が現実味を増しています。衰退原因の第一は、少子高齢化と人流による檀家数の減少とか。

でも、マーケットが小さくなっているのはお寺だけではないでしょう。どの業種でも同じではありませんか？

「ガンバレ！」というだけなら誰でも言えます。また、世の中には頑張りたくても頑張れない人が大勢いるのです。どう頑張れば良いのかを一緒に考えてみませんか。

読者の皆さま、あなたの菩提寺の和尚さんは１人ですか２人ですか？ 経済規模からいうと個人商店と変わりません。しかし、宗教法人は公益法人と認められています。

生き残るお寺は企業（法人）と同じで、新規顧客開拓と新商品（新しいサービス）開発のための再投資を欠かしていません。マーケティングの最高は、こちらから売り込みに行かなくても、お客さんの方から来てもらえること。そういうお寺ですか？

若い人は宗旨宗派など気にしません。「お参りしてみたい」と思ってもらえるお寺は、一人ひとりの和尚さんの研鑽にかかっているのです。宗門の大学の佛教科で「寺院経営」という科目があったでしょうか。

コロナ禍で年間行事の実施もままならず、この３年間は切歯扼腕。紙に書いて壁に貼ったのが松下幸之助さんのことばでした。

あせらず
くさらず
あきらめず

佛教のこころを判りやすい３行にまとめられています。本当に励みになりました。

若い和尚さんたちは私の時代の２倍も３倍もの勉強が必要になります。佛教離れではなく、お寺離れ、坊さん離れです。ご精進を続けられて、「お参りに行きたいお寺」をつくられますように。

迷走ボー

㊟『現代の経営』（P・F ドラッカー著 上田惇生訳 ダイヤモンド社）

『私説法然伝』（９３）

助けてほしい⑧

先月号では法然上人の弟子になる武者・熊谷次郎直実について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【法然上人の弟子となった熊谷次郎直実は、名を法力房蓮生（ほうりきぼうれんせい）と改めた。僧となっても熊谷次郎直実という一個の男子の本質はあまり変わらなかった模様ではある。

ある時、九条兼実卿が法然上人を招くことがあった。蓮生は押しかけ従者としてついて行くことにした。九条兼実卿の館では法然上人は一人九条兼実の部屋を通されたが、従者である熊谷次郎直実は控えの間で待つことになった。どうしても法然上人の話が聞きたい蓮生は大声で「この娑婆世界ほど嫌なものはない、これが極楽浄土なら自分も平等に法然上人のお話が聞けるものだろうに」と聞こえるように言ったという。九条兼実卿は驚いて法然上人に誰がいるのかと尋ねた。法然上人が説明すると、九条兼実卿は蓮生も部屋に招き入れたという。この逸話は説教のための話とも言われているが、ここにも蓮生こと熊谷次郎直実の大事な点が示されているのである。それは彼が実に明確に本願念佛を理解していたということである。関白というこの世の頂に立つ超大物の前でも物怖じせずに文句を言えるのは熊谷次郎直実という男の胆力のたまものだろうが、極楽浄土なら平等に法然上人の話を聞けるだろうにという内容からわかるのが「極楽浄土には身分差別などが無い」という事であり、つまり本願念佛は身分差別などを一切否定する性質があることを蓮生がよく理解していたという点である。

本願念佛とは、ただ佛が衆生を救うのであるが、衆生は等しく救うべき存在だから救われるのである。つまり佛という完全な「善」に対して衆生は「悪」だから救うということである。完全な「善」が成立するためには「悪」があってはじめて成り立つのである。その「悪」の世界がこの世の娑婆世界であり、「善」の世界が極楽浄土となる。だから極楽浄土には差別など存在しないのである。だからこそ蓮生はこの世で大声を上げたのだ。彼もまた悪であるからこそ、声を上げたのである。**】**

熊谷次郎直実は法力房蓮生という名前をいただき僧侶となりました。そこで第二の人生のスタートなるわけですが、僧侶になるということがどういうことなのか？という事を彼の生き方が我々に示しているように感じます。本願念佛を信じる僧侶とは「善」を目指しながら「悪」の中で生きることになるのです。以下次号に続く（征阿）

当時の貴族の屋敷（寝殿造り）